

今日は、11月2日。あれからちょうど1年になる。昨年の11月2日には、福島県立梁川高等学校「創立百周年記念式典」が本校体育館にて行われた。

今、私の手元には「創立百周年記念誌『鶴ヶ岡』」がある。両手で持ってみる。ずしりと重い。これが百年の重みなのか。りっぱなケースから本体を出してみる。えんじの布地に金の題字が映える。元本校教員の郡司仁美先生の揮毫による。重厚感かつ高貴さを感じさせる文字である。

表紙を開くと、福島県美術協会会長であり、本校の美術教師としてご活躍なされた酒井昌之先生の手による校舎のスケッチが目に飛び込む。この絵が素敵である。酒井先生のスケッチは、様々な場面で使わせていただいている。

2ページ目の目次に目を通す。あいさつに始まり、百年のあゆみ、百周年に寄せて、そして資料編と、編集者のご苦勞がうかがえる。

3ページ目に目を移すと、顔写真入りの「記念誌発刊によせて」という校長のあいさつ文が現れた。何か不思議な気分である。この写真が自分とは思えないような、まるで他人事のようなのである。気恥ずかしさとは違ったものである。「なぜ自分がこのページにいるのか」「百周年の年の校長が自分でいいのか」改めて自問自答してみた。

不思議な縁である。この立派な記念誌はずっと形として残る。私が梁川高校の校長であった証でもある。目次の次の3ページ目に掲載していただいている重みと責任を感じざるを得ない。身の引き締まる思いである。

あいつさつは、伊達市長、PTA会長、記念事業実行委員長、生徒会長と続く。そして、校舎全景写真とともに校歌が出てくる。桜の時期の素敵な写真である。旧校歌、応援歌、校是、現校旗に旧校旗、校章も現在のものと旧とがある。

歴代学校長の顔写真が並ぶ。私の高校時代の先生もいらっしゃる。次は「創立百周年記念式典」の写真が出てきた。一気に1年前の記憶と感動が蘇る。内堀県知事様、鈴木県教育長様にご臨席いただき、ごあいさつを頂戴した。生徒の姿勢がすばらしい。校歌を歌う同窓生の方々の表情がいい。

記念式典後の記念公演「村上ファミリーコンサート」の写真が載っている。ご家族のすばらしい歌声が思い出される。部活動のページの写真、文章ともによい。写真のせいだろうか。それぞれの部活動のページが生き生きと輝いている。

百年のあゆみのページにいくと、大正時代からの写真が並ぶ。当然かなり前の写真のはずなのだが、あまり古さを感じさせないのはなぜだろうか。大正時代の女学校の頃の生徒たちが、いま目の前にいるように感じる。それぞれの時代の生徒の写真を見ると、髪型をはじめとして懐かしさを感じずにはいられない。

百周年に寄せてのページになると、一つの読み物としておもしろかった。共通しているのは母校への思いである。資料編に進み、旧職員の名簿を見ていくと、高校時代にお世話になった担任の先生のお名前があった。あの方もこの方も知っているお名前が出てくる。

一気に261ページを読んでしまった。本校教員である佐藤貴子先生による編集後記には、「梁川高校は、知れば知るほど、汲めば汲むほど尽きることのない豊かな歴史の泉でした」という一節がある。これが一気に読ませてくれた、この記念誌の魅力であろう。記念誌『鶴ヶ岡』は、1万3千人を超える同窓生と長きにわたり梁川高校を支えてくださった方々の思いが詰まった心のモニュメントである。